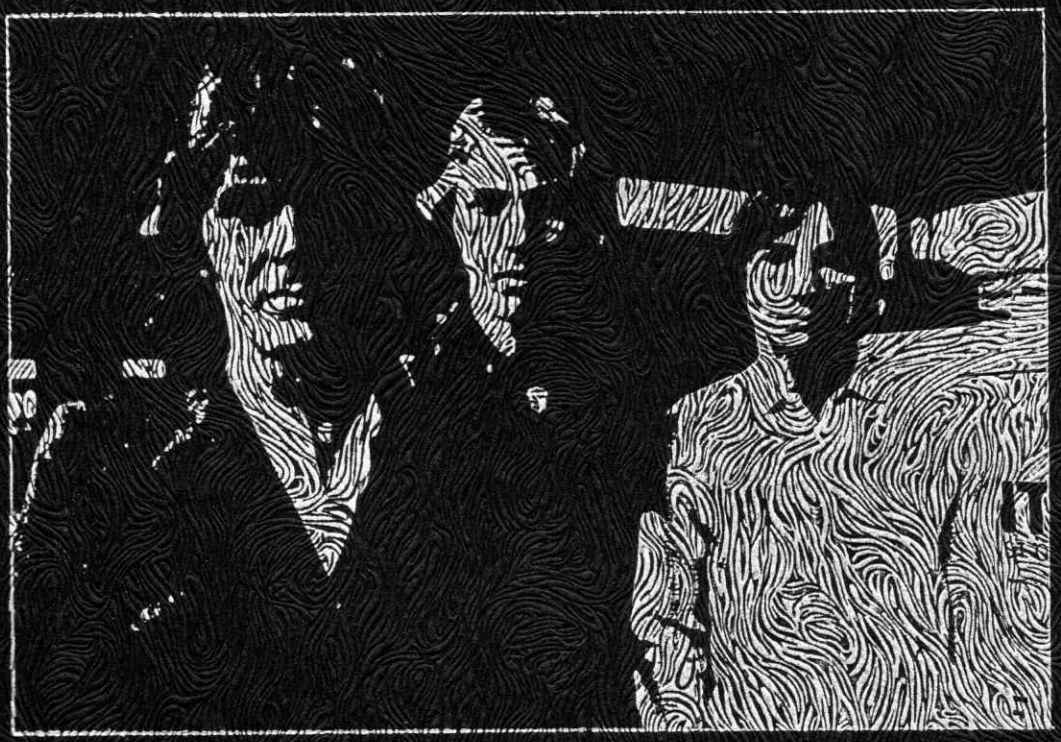
ЦК



CONCERT SCHEDULE IN JAPAN

5月29日(火) 東京・中野サンプラザ

5月30日(水) 東京・中野サンプラザ

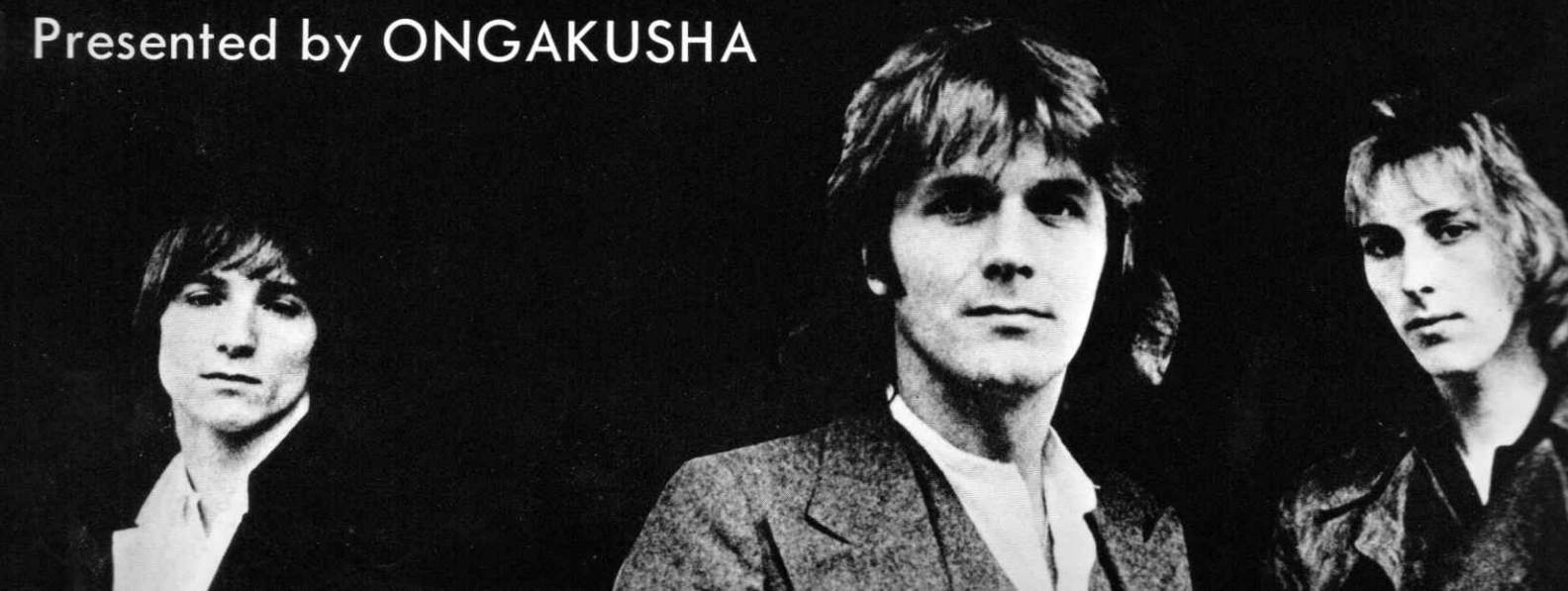
5月31日(木) 大阪・大阪厚生年金会館

UK

6月1日(金) 名古屋・名古屋勤労会館

6月4日(月) 東京・日本青年館

Presented by ONGAKUSHA



『ぼくはスケールの大きな音楽が好きさ
ELPとかピンク・フロイドのように、
スタジアムをいっぱいに満たすような、
もしかすると呑み込んでしまうような、
大きな大きな音楽がね』

EDDIE JOBSON

EDDIE
JOBSON

1974年9月28日――その日、ブリティッシュ・ロック・シーンにおいて、最も〝伝統的な〟バンドが終わりを遂げた。そして、その瞬間、今度は新しい伝説が始まろうとしていた。キング・クリムゾンというロック史上最強のバンドの〝核〟たちは、それぞれが、その伝統を継承し、自分たちから始まる伝説に向けて、翔びたったのである。

ジョン・ウェットンは、クリムゾンを脱けてから、同じＥＧミュージックに所属するロキシー・ミュージックに参加するが、すぐにユーライア・ヒープに正式に加入する。一方ビル・ブラッフォードは、種々のバンドを渡り歩き、その都度正式加入が噂されるが、結局いつもゲスト参加にとどまる。ゴング、ロイ・ハーパー・バンド、パブロフズ・ドッグ、アブソリュート・エルスウェア、そしてジェネシス、ナショナル・ヘルス……。

76年に入ると、この２人のリズムセクションは、自分たちのバンド結成を計画する。２人の計画はＥＬＰスタイルのバンドを組むことで、キーボード奏者として２人が誘ったのは、あのリック・ウェイクマンだった。ウェイクマン、ウェットン、ブラッフォードというトリオが実現すれば、間違いなくＥＬＰの最大のライバルとなるはずだった。このバンドの記事は英国の各音楽誌に大々的に報じられたが、結局実現には至らなかった。幻のスーパートリオ〝ＷＷＢ〟は、リック・ウェイクマンが、パトリック・モラーツの後釜としてイエスに復帰することになったため、何回かのリハーサルまで行いながら、不可能になったことになっている。しかし本当は、このバンドがリック・ウェイクマン＆ヒズ・バンド的な売り出し方をせざるを得なかった点が理由のようだ。ウェイクマンは既にビッグ・ネイム過ぎたのだ。ジョンもビルも、リックの単なるバック・アップ的な存在だけでは満足出来るわけもなかった。

こうしてジョンとビルはまた離れて仕事をすることになるが、その間もお互いに連絡は取り合っていたし、バンド結成の夢は捨ててはいなかった。ビルは77年11月に初のソロ・アルバム(「Feel Good To Me」)を発表。そこで彼は、パーカッショナーとしての実力の他に、ライターとしての才能も初めて十分発揮し切っていた。このソロ・アルバムの発表を契機に、ビルは再びジョンと本格的にバンドの結成を企てる。そして２人が、リック・ウェイクマンに実力では勝るとも劣らないと判断し、選んだのがエディー・ジョブスンその人だった。

恐らくエディー・ジョブスンは天才的ミュージシャンであろう。かつてのクリムズンの影の総師、イアン・マクドナルドと同じぐらいに……。わずか16才でプロのミュージシャンとなり、17才で一流バンド（カーブド・エア）に加入してしまったエディーは自分の実力に相当の自信を持っている。クラシックの教養と、確かな演奏力からのプロ意識が彼に常に自信過剰とも思える程の発言をさせる。しかし、実際に彼はその自信どおりの力を秘めている。特に音楽に対するセンスの良さでは、キース・エマーソンもリック・ウェイクマンも及ばないほどだ。カーブド・エアを脱けたあと、彼はロキシー・ミュージックに加入する。しかし、ロキシーはエディーがその才能を十分に発揮出来るバンドではなかった。なぜならロキシーはブライアン・フェリーのバンドであり、その演奏はすべてフェリーの指揮下にあったからだ。エディーはロキシーにおいては、単なる決められた曲を決められたように演奏する、ロボット的な役割しか果せなかったのだ。

イエスからの誘いを断わり、彼が次に加わったのはアメリカのフランク・ザッパのバンド、マザースだった。エディーはザッパのバンドの一員となって、ある大きな収穫を得ることが出来た。それは他ならぬ、自分がかの大英帝国のミュージシャンであるという自覚だった。さまざまな、スタイルの異なるバンドを巡り歩き、自分自身の音楽の方向性を探し求めていたエディーが得た結論とは、自分の持っているものを最大限活用するということだったのだ。彼が必死で身につけようとしていたジャズ、ブルースの要素以上に、始めから身につけていたクラシックのバック・グラウンドこそが彼の最大の武器、持ち味だったわけだ。そして、彼は伝統の国、英国のミュージシャンであり、従ってアメリカのミュージシャンがどうしても持ち得ない、あの重厚なサウンド指向を生まれながらにして身につけていたのだ。

ジョン・ウェットン、ビル・ブラッフォードというキング・クリムズンのリズム・マシーンと、限りなき未知の可能性を秘めた天才ミュージシャン、エディー・ジョブスンは、遂に合体したのだった。３人が３人共英国人であることに誇りを持っていた。エディーはジョンとはロキシー時代に共に仕事をしたこともあるし、それ以前にもクリムズンの〝ＵＳＡ〟(ライヴ・アルバム)に(Remix Assistanceとしてだが)参加している。そんな関係で、ジョンやビルはエディーのことはよく知っていたが、彼が有名バンドにいつも加入していたので誘ってものるとは思ってもいなかったのだ。しかし、エディーの考えは、丁度ジョンやビルの企てと正に一致していたのだ。そう、ユナイテッド・キングダム・バンド、英国だけの伝統的なバンドを結成するという点で。

アラン・ホールズワースは根っからのジャズ指向者だ。彼がプロ・ミュージシャンとしての初のバンド、イギンボトムで弾いているギター・スタイルは、ジャズのそれである。イギンボトムは当時音楽誌よりジャズ・ポップ・バンドとして紹介されていたが、その中心人物はアラン・ホールズワースだった。イギンボトムの残した唯一のアルバム「イギンボトムズ・レンチ」で彼は、作曲者としても中心となっている。指の動きの早さでは、当時（69年前後）既にジェフ・ベック以上だった。その後彼もまるでジプシー・ミュージシャンとでも言うべく、多くのバンドを転々とする。元コロシアムのジョン・ハイズマンのテンペスト、ソフト・マシーン、ゴング、トニー・ウィリアムス・ライフタイム等々…。テンペストを除けば、どのバンドもジャズ色の濃いバンドばかりである。実際彼はジャズのCTIレーベルよりソロ・アルバムも一枚発表しているし、今人気最高のジャン・リュック・ポンティのアルバムに参加したこともある。

元々トリオ・スタイルとなるはずだったが、ビルのソロ・アルバムで大活躍していたアラン・ホールズワースもメンバーに決まり、結局バンドは４人編成としてスタートしたのだった。バンド名は、もうこれ以外に考えられないほど、実に彼らしいダイレクトしたもの、ずばりＵＫと（ビルによって）付けられ

TERRY
BOZZIO

た。UK（United Kingdom）と名乗るこのバンドは、その名のとおりアメリカからは絶対出て来ることのない重厚なサウンドを持った〝インテリ・バンド〟だ。彼らは、ともすればすべてのブリティッシュ・バンドの（金と名声のための）アメリカ指向を逆手どって、むしろブリティッシュ臭さを徹底的に打ち出したバンドであった。彼らの英国人たる強い誇りは、そのままサウンドに反映されている。コマーシャリズムを自ら否定し、高度な音楽創造のみをひたすら目指す職人的な仕事ぶりは、妥協というものを決して許さない強固な姿勢の表われであり、キング・クリムズンの唯一の後継者と呼ばれるに相応しいものだ。こうして伝説は始まったのだ、新しい……。

キング・クリムズンという希代のバンドがロバート・フリップという独裁者のワンマン・バンドであったのに対し、UKは4つの頭脳（＝才能）のぎりぎりの妥協点がその方向を生み出して行くといった共同体的性格を持ったバンドだ。彼らUKの生み出す音楽の面白さはここにある。全員が完全に納得し切るまで、UKサウンドの完成はあり得ないのだ。インプロヴァイゼーションを基本とするジャジー・スタイルの音楽指向のアランとビル、逆にかなりヘヴィーで、どちらかというとコマーシャルな面を含んだロック指向のジョン、そしてクラシックのエディー、この4人が煮詰め合って初めて得たぎりぎりの接点音楽は、だから、とてつもなく密度の濃い音楽なのである。

78年春に発表したデビュー・アルバム「憂国の四士」は、クリムズン解散後、パンク一色といった感じのブリティッシュ・ロック・シーンに、まったく久々に登場した本当の本物のブリティッシュ・ロック・アルバムと言える。ここには、まるでわざと計算したかのように、アメリカン・ロックにない（というより持てない）要素がすべて含まれていた。そのブリティッシュ独特の奥深さ、歴史的な重みは、サウンドのちょっとしたふしぶしにも強く感じられ、伝統的ブリティッシュ・サウンドの出現を待ち望んでいた多くのファンから熱狂的に受け入れられたのだった。誰もが出来ないような音楽をあえてやることを哲学とするUKの、超高度な次元での激しき葛藤ぶりは、表面的にはスムーズで、かつ壮大なスケールの音楽となって聴き取れるが、ここまで来るのに費やされたリハーサルは気が遠くなる程だった。彼らはチープなフィーリングなどよりは、リッチな努力の方をためらわずに選ぶ真のプロフェショナルなのである。

「憂国の四士」において、とりわけ聴き手を驚かせるのは、やはりエディー・ジョブスンのキーボード＆ヴァイオリン・プレイだろう。彼の若さの割には豊富なキャリアの内で、本当にその力が発揮されていたのは、カーブド・エアの4枚目のアルバム「エアー・カット」であり、その中の「メタモルフォシス」であった。それ以来エディーは、なまじっか名のあり過ぎるバンドに加入したため、既にそのバンドのスタイルが完成されており、彼の才能を発揮することは出来なかった。しかし、UKに至って、やっとあの空前の（そして、知られざる？）名曲「メタモルフォシス」並の音楽的構成力とグッド・センスが開花したのだった。エディーのプレイのうち、ヴァイオリンは元々ダリル・ウェイをしのぐ程のテクニックを持っているが、むしろ最も高く評価すべきはそのシンセサイザー奏法である。はっきり言ってただ弾くだけのキース・エマーソンやリック・ウェイクマンと違って、エディーはシンセサイザーをとてつもなくよく研究している。音色が違うのだ。カラフルで表情豊かな彼のシンセサイザー・プレーは、UKサウンドの重厚さの最大の要素であり、同時に最大の特徴でもある。

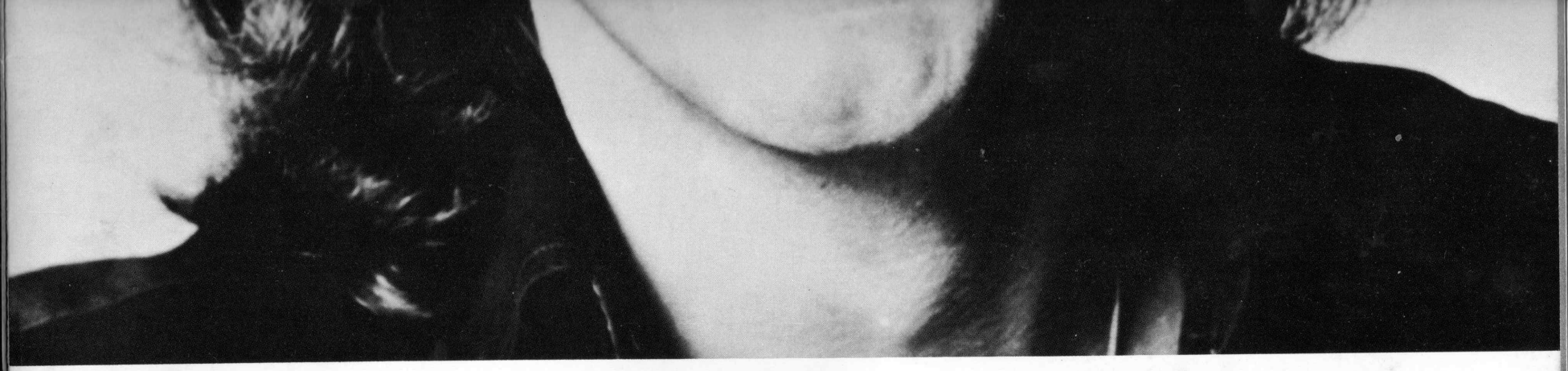
「アラスカ」に耳を傾けて欲しい。これは彼の作品だが、このようなビッグ・スケールな空間はかつて、キースもリックも創造し得なかった。非常に動きの少ないシンセサイザーのうねりのイントロから、エディー特有のきらめくようなシンセサイザー、リズムに入って行くその瞬間の素晴しさは、彼ならではのものだ。デビュー・アルバムにおいて、少なくとも作曲面ではエディーが中心となっている。それは彼のみが全曲の作者として名を連ねていることからも判断出来る。

むろんジョンとビルのリズム・セクションの確かさは、文に出来ないほどだし、男の哀愁いっぱいのジョンのヴォーカル、そしてアランの信じられないような早弾きもUKの重要素であることは確かである。これだけの音楽が展開出来る背景には、彼らの音楽的なマテリアルの蓄積というものが、大きな比重を占めていることをまた忘れてはならない。特にジョン・ウェットンのモーグル・フラッシュ、ファミリーで得た経験は大きい。ファミリーもまた、クリムズンとタイプは少々異なるがブリティッシュっぽさの濃度では他のどのバンドにも負けない。これは単に一例に過ぎないが、これら目に見えない諸要素が、UKに影響を及ぼしていることは間違いないところだ。

UKはとてつもなく個性の強い男たちの集まりだ。従ってこれら異った個性は長く同居することはほぼ不可能なのである。丁度キング・クリムズンやソフト・マシーンといったバンドが、アルバム発表ごとにメンバー・チェンジを繰り返したように……。例えばそれはジャズにおけるセッションの形にも近い。つまり合体と分裂の反復によって、音楽を昇華させて行き、自分たち自身がより高みを目指すわけである。超個性集団であり、ひとりひとりが一国一城の主（リーダー）となるに十二分の力を持った4人からなるUKも長くはもたなかった。その分裂は形としては意外だった。なぜならリズム・セクションであり、元々バンド編成の立役者でもあったジョンとビルが離れてしまったからだ。この分裂について、彼らは多くを語っていないが、やはりビルとしてはもっとジャジーな、つまり先のソロ・アルバム・スタイルの音楽をしたかったことと、たぶん、UKにはあまりにも優秀なライターが他にいたからだろう。アラン・ホールズワースがビルと行動を共にしたのは前述した理由でうなずける。2人共ジャズ・ロック指向のミュージシャンだったし、第一にアランはビルの紹介（と誘い）でUK入りしたのだったから。

そしてジョン・ウェットンとエディー・ジョブスンが残った。UKは丁度2つに分裂したのだ。新UKのドラマーは、エディーがマザースに在籍していた時のドラマーだったテリー・ボジオ。彼もエディー同様正規の音楽教育を受け、オーケストラのパーカッショナーもしたことがあるという。その後アフロ・ロックのアズテカに加入し、マザースにはオーディションを受けて入ったというから腕の

JOHN
WETTON



方は確かだ。ザッパのバンドは相当の実力者でも中々加入出来ないので有名なのだから。テリー・ボジオのドラミングは、ビルと比べると、まず、ずっとパワフルだ。複雑なリズムを次々と叩きだすビルのドラミングと違って、テリーのリズムはひとつひとつ確実に力強くきざまれていく。第1期UKとの決定的な違いは、やはり、このドラミングに尽きるようだ。

初期の計画どおりトリオとなった第2期UKのアルバム「デンジャー・マネー」は今春発表されたが、そのタイトル・ナンバーでA面トップに収められた「デンジャー・マネー」のテリーのヘヴィーなドラミングは、新しいUKの魅力とするに十分な魅力と可能性を持っている。ビルのあのドラミングがUKサウンドにおいて、あまりにもぴったりとおさまり過ぎていたとすれば、テリーのドラムは逆に新鮮にさえ聴こえる。しかし、アルバム中では小曲ながら素敵な雰囲気を持った佳曲「ランデブー6:02」を聴けば、この新しいドラマーが、実は繊細な面も持ち合わせていることに気づくはずだ。前半のハイハットをうまく使った切れのいいリズム感は、彼のナイーブな面を感じさせる。アルバムの中では、むろん大作「キャリング・ノー・クロス」や、先の「デンジャー・マネー」、そして「ジ・オンリー・シング・シー・ニーズ」といった長目の曲が人気を呼ぶことだろうが、アレンジ面で、この「ランデブー6:02」はむしろ最高の一曲とも言える。

トリオとなったUKの中心人物は、完全にエディー・ジョブスンだ。デビュー・アルバムでも、アラン・ホールズワースのギター音が、エディーのシンセサイザー音と非常に似ていたため、かなり注意して聴かないと、まるでエディーの一人舞台のように聴こえてしまったが、ここでは完全にリードはエディー。キーボード群と、ヴァイオリンを信じられない程巧みに、まるで自分の身体の一部のように使いこなしてしまうエディー。キーボードの魔術師とは、リック・ウェイクマンなどでは断じてなく、エディーのためにあるような言葉ではないだろうか。まったくよくもこうも次々と色々なキーボードを繰り出すものだ。センスの問題なのだろうか……。

B面では特にヴァイオリンがかなりフィーチャーされている。「シーザース・パレス・ブルール」。「キャリング・ノー・クロス」は総てのUKファンを魅了させてしまうことだろう。ミステリアスなイントロに導かれて、ジョンが切々とヴォーカルをとって行き、やがて曲はジェネシス調の盛りあがりをみせ、エディーのキーボードの独壇場となるが、注意して聴くと、テリーのもの凄いテクニックもわかるはずだ。また、エディーのキーボード・プレイの素晴しさのひとつにグランド・ピアノの導入がある。このアコースティック・ピアノの突然の導入のタイムリーさは「メタモルフォシス」でもそうであったが、サウンドにハッとした効果を持たせている。曲は、長いインストゥルメンタル・パートを過ぎて再びヴォーカルが入り、静かに終る。

恐らくファンが期待していた音にそっくりそのまま応えている点で、このセカンド・アルバムはデビュー・アルバム以上の評判を呼ぶものと思うが、興味深いのは、シングル・カット向きのB②「ナッシング・トゥ・ルーズ」のようなナンバーの存在である。このナンバーあたりが、エディーの言う〝コマーシャルな〟ナンバーなのだろうが、むしろA②や、このB②あたりにUKの未来が潜められているように感じられるのだ。

今回来日する3人のUKの中で、ジョンとテリーは既に来日を果している。ジョンは、ロキシー・ミュージックのブライアン・フェリーのバック・バンド・ミュージシャンとして、フィル・マンザネラ、クリス・スペンディング、メル・コリンズ等と共に、そしてテリーはむろんマザースの一員としてだ。だが、観客の目は恐らく初来日のエディー・ジョブスンに終始集まるに違いない。(特に女性ファンは…) UKのようなキーボード・バンドというと、やはりELPが来日しているし、あと、リック・ウェイクマンあたりだろう。イエス、PFM、ジェネシス、キャメルといったバンドも、キーボードがそのサウンドにおいてかなり重要な位置を占めてはいるが、キーボード・バンドではない。リズム・セクションについては大体の想像がつくが、エディーがレコードで聴けるような目まぐるしい程のヴァリエーションに富んだキーボード・プレイぶりを、ステージでどの程度まで再現してくれるのか、ヴァイオリンを弾いている時、バックのキーボードは……とか興味は尽きない。

残念なのはまたも、ビル・ブラッフォードのドラミングを見られないこと。またもとはイエス来日の時も、丁度アラン・ホワイトに替わったばかりで、来なかったからだ。今まで来日したドラマーの中でピカーはフィル・コリンズか、キャメルのアンディー・ワード、それにPFMのチョッチョあたりだろうが、ビルのドラムスは是非見たかったところだ。アランも最初は日本公演には来るのではないかとの噂もあったのだが……。彼らにはニュー・バンド、ブラッフォードとしての来日を期待するとしよう。この原稿を書いている時点でブラッフォードの音はまだ耳にしていないが、やはりあのソロ・アルバムのサウンドに近いとのことだ。デイヴ・スチュワートという地味だが恐るべく頭脳を得たブラッフォードの今後にも是非注目して行かねばならないだろう。

昨年から今年にかけていわゆるプログレ・バンドが2つ程来日した。ジェネシスとキャメル、両方とも招聘元が驚く程の人気とリアクションがあった。ジェネシスは、信じられない程完璧なステージングを、そしてキャメルは、以前とは変身して、レコードとはまた違った、どちらかというとアドリブ主体のジャジーな演奏を披露してくれた。両方とも文句の付けようがないぐらい素晴しいステージで、近年これ程集中出来たコンサートも珍しいぐらいだった。UKはキーボード主体のトリオという、他のバンドとはスタイルの違う幾分特殊なバンドだ。そういった面からの期待も大きいし、顔ぶれからして、彼らなら絶対につまらないステージになるわけはないと信じている。

ブリティッシュ・ロックの〝伝統〟の2文字を守り続けてくれるUKに、我々真のブリティッシュ・ロック・ファンがかける期待は自然大きくふくらんでいく。しかし、彼らなら、その期待に必ず応えてくれることだろう。

1979. 4. 20. (あとひと月の辛抱！)

たかみ ひろし／Hiroshi Takami

失なわれたアイドルの復活――U.K.

現在のブリティッシュ・ロック・シーンは知ってのようにニュー・ウエイヴの凄まじいパワーの台頭でロック新時代に突入している。しかし、その勢力は往年ほどのエネルギーこそ失なわれつつあるが依然ブリティッシュ・ロックの伝統を守り続けているグループの存在も見逃がすことは出来ない。その代表的なグループがいよいよ来日するUKである。

UKはそのグループ名がしめすように、大英帝国の誇りの中から甦った、まさに失なわれたアイドルの復活だったといえよう。ビル・ブラッフォード、アラン・ホールズワース、ジョン・ウェットン、そしてエディ・ジョブソン――各々がブリティッシュ・ロック・シーンの一時代を画した、現在のイギリスを代表するミュージシャン達によって結成されたグループ、UK。

現在UKはエディ・ジョブソン、ジョン・ウェットン、テリー・ボジオというトリオ編成の第2期UKとなっているが、ニュー・アルバム『デンジャー・マネー』で披露した緊張感溢れる音創りは、前作に勝るとも劣らない感動を与えてくれた。きっとひと昔前ならばプログレッシヴ・ロックという言葉に象徴されたであろうその斬新なサウンドは、現在のブリティッシュ・ロック・シーンを見まわして比較対象になるべきグループがいないために、どういう言葉で把握したらいいのかイギリスの音楽評論家達もとまどっているようだ。

ほんの少し以前にはUKタイプのグループはけっこう存在していた。同系列という意味で名前を挙げるならキャラバン、ハットフィールズ&ザ・ノース、キャメル、ノヴァ、エニドゥ、グリーン・スレイド他、もちろん大御所のELP、フロイド、イエスなどもいるが、現在は解散してしまったり、活動を停止したりと、ほとんどがシーンから消えてしまっている。UKを脱退したビル・ブラッフォードとアラン・ホールズワースが、かつてビル・ブラッフォードのソロ・アルバムに参加してくれたミュージシャンを集めてブラッフォードというグループを結成したが、やはり思ったとうりUKとは多少路線の違う音楽スタイルで登場してきた。さらに、ハット・フィールズ&

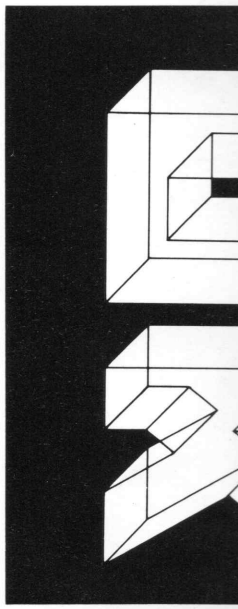
ザ・ノースの残党がナショナル・ヘルスを結成したり、ギルガメッシュなるグループが復活したりという明るい材料もあることはあるが、UKとは違ってマイナーなアヴァンギャルドな活動に彼らは活路を見い出しているようだ。もっと深く考えるなら、かつてブリティッシュ・ジャズの流れを形成していた人々、たとえばイフのディック・モリシーに代表されるミュージシャン達は、ロニー・スコット・クラブに出入りするジャズメンとの交流を深め、最近ハーヴェストあたりからレコードを発表しているが、UKの追求している音楽姿勢とは全く逆方向に位置するものを精進している有様だ。このようにUKは、現在イギリスを代表するグループでありながら、比較対象もなくきわめてユニークな存在としてロック・ファンの注目を浴びているのである。

UKのツアー・スケジュールを見てみると一般会場の他にカレッジ・ツアーがわりあいに多いことに気がつく。このスケジュールは、UK、さらにはUKのマネージメント・オフィスが、自分達のファン層というものを正確に把握しているところからわり出したものだろう。少なくともUKのファンの大半はイギリスの場合大学生が主流だ。UKのサウンドに秘められたインテリジェンスに共鳴するように、彼らはコンサート・ホールに集まってくる。アメリカにもイギリスとほぼ同じことが言えるという。こういう状況から判断してＵＫの持つ高度な音楽の支持層というものが比較的高いことに気がつくはずだ。

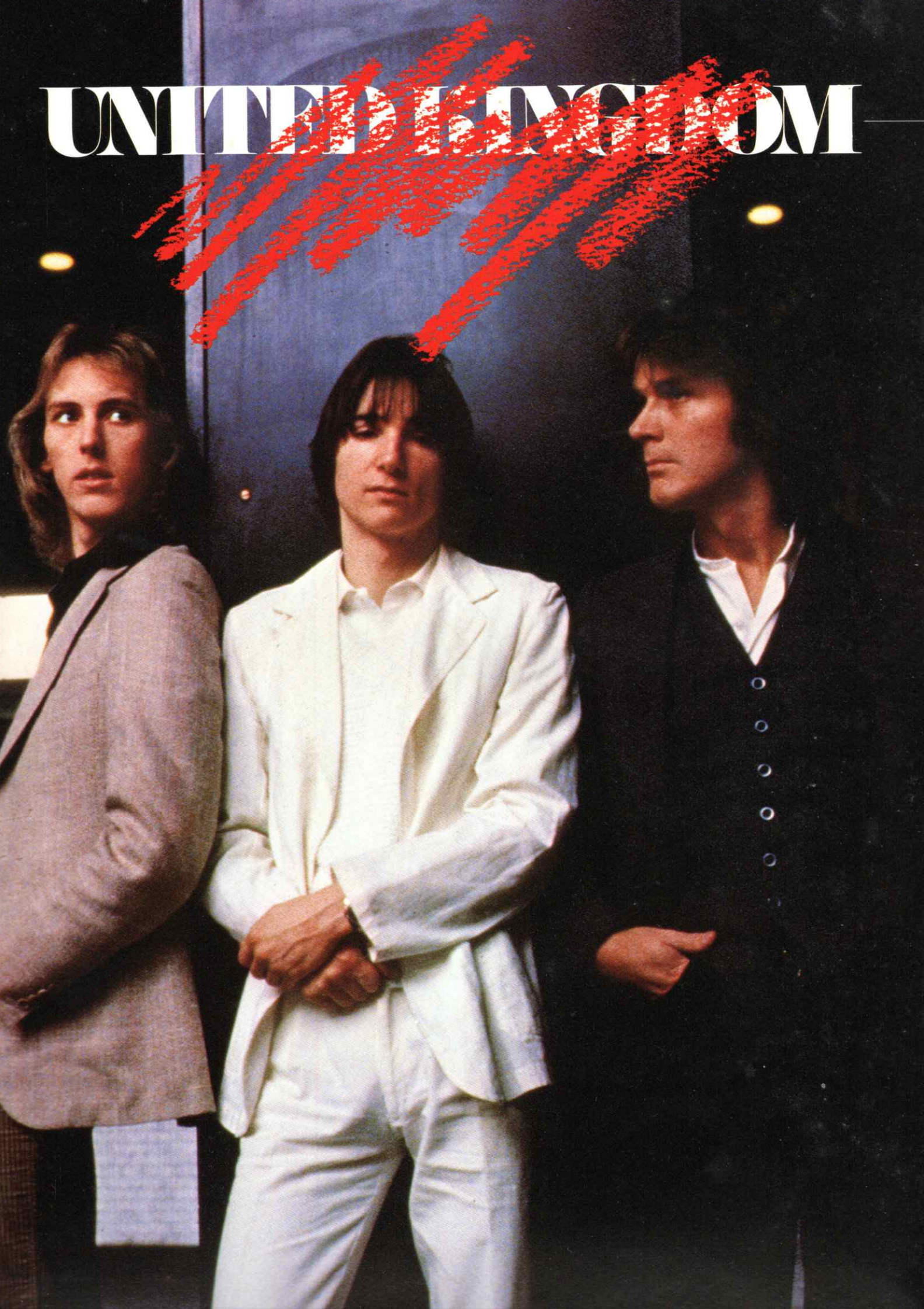
UKは『デンジャー・マネ』からトリオ編成となった。だいたいにおいてトリオ編成というインプロヴィゼイションにたよるグループが多い。しかし、UKは決っしてむやみなインプロヴィゼイションを多用することはない。あくまでもある程度の計算された合理的な音の配合を試みていく。こういった緻密で高度なテクニックを見せつけていくUKの魅力はやはり、ロックというものを聴き込んでいないと正確には把握できないのではないだろうか。だから、アメリカ、イギリスにおいては圧倒的に大学生クラスのファンが多いのだ。

しかし、日本のロック・ファンはそうとう確かな音楽的センスを持っている。それは世界中のロック関係者が知っている。その日本で、現在最も高度なテクニックを誇るUKがついにその勇姿を現わすことになった。彼らは必ずやベスト・プレーを聴かせてくれるに違いない。僕は今からUKと日本のロック・ファンの対決に胸をときめかせている……。

伊藤政則／SEISOKU-ITO



UNITED KINGDOM



UK

ロックの政治

シャンとしての真
クリムゾン時代に
い目に、みごとに
1974年、彼はキ
ストとして、ロバ
ラッフォードと共

ロックの政治

ジョン・ウェットン

さまざまなロック・ミュージシャンと、それぞれの意味あいにおいて劇的な出合いをした。トミー・ボーリンやシド・ヴィシャヌと、その突然の死のほんの数ヶ月前にインタビューをしたのは、今も強烈な思い出だ。ニューヨークの無名時代のパティ・スミス、マジソン・スクエア・ガーデンのブルース・スプリングスティーン、「シルク・ディグリーズ」をレコーディング中のボブ・スキャッグス、デビューしたばかりのヴァン・ヘイレン、アビー・ロード・スタジオのポール・マッカートニー……あらゆる出合いはセンセーショナルなドラマだった。

ジョン・ウェットンとは、もう5年来、友情とでも呼べばいいだろうか、そんな関係が続いている。最高調の彼も、低迷期の彼も見てきた。しかし、いつ会っても、およそ大ぎょうなドラマとは無縁の人なのだ、そのみごとなキャリアとは裏腹に。力強くこぶしをふりあげてみせるとか、激しく状況を弾劾するとか、ロックン・ローラーがよくやるパターンをまったく演出しない。淡々と大人の生きざまをもち、クールな目でロックと自分をみつめつづけてきたジョン・ウェットン。

そのクールさが、決してつきはなした冷たさからきているのでなく、ロック・ミュージ

シャンとしての真し
クリムゾン時代に身
い目に、みごとに支
1974年、彼はキン
ストとして、ロバー
ラッフォードと共に
中だった。ニューヨ
ューに応じてくれた
ツにネクタイをしめ
アタッシュ・ケース
というのをさしひい
ンである。ほとんど
ューに参じた私だが
強く彼のイメージを
ーを飲む手つきも、
ト・フリップが現わ
た私の懸念はすっか
ロック・ミュージ
肌、評論家肌の青年
才だったはずなのに
ロック界における彼
た。ロバート・フリ
ノのような「奇才」
のあたる場所だけを
しかし、私はジョン
うひとつのイギリス
ジョンは競馬で有
ビーに生まれた。ク
ち、兄が教会で宗教
もあって、バッハの
幼い時はピアノやオ
12才の頃、エバリー
ズをきいて夢中にな

ロックの政治から遠くはなれて……

シャンとしての真しな生活観、およびキングクリムゾン時代に身につけたロックへの厳しい目に、みごとに支えられているのだ。

1974年、彼はキング・クリムゾンのベーシストとして、ロバート・フリップやビル・ブラッフォードと共にアメリカン・ツアーの最

た。クラシックからロックへという、イギリスの60年代のミュージシャンに多かったパターンである。

大学を中退し、これといったあてもなく途方にくれていた彼に、友人がルーマニアに行かないかという話をもちこんできた。ロック・グループがルーマニアに公演に行くことになったのに、ベーシストがいない、ジョンにベースをやればルーマニアに行けるというのだ。彼は10分間だけ考えて、ベーシストになる決心をした。

それからモーグル・スラッシュ、ファミリーを経て、後期のキング・クリムゾンに参加し、ベーシスト＝ヴォーカリストとして、グレッグ・レイク、クリス・スクワイアと並ぶ評価を受けるようになる。キング・クリムゾンという、いわばロバート・フリップのワン

あることを話してくれた。エッ？ベーシストのソロ・アルバム？と私がけげんそうにそう尋ねると、非常に心外だという顔で、自分はベーシストであると共にミュージシャンであることを力説していた。彼があんまりいちずになっているのをみたことがなかったので、ちょっぴりかわいらしいなんて思ったりした。

そのソロ・アルバムは、リック・ウェイクマンを加えた幻のバンドの話がもちあがったため実現せず、ヒープをやめたジョンは再びブライアン・フェリーにさそわれて彼のバック・バンドに加わり、1977年夏、クリス・スペディングらと共に来日した。しかし、往年の美貌（？）は影も形もなく、ひたすら健康そうに太ったジョン・ウェットンがいたのだ。哀愁とかかげりとかは、みじんもなく、職業ミュージシャンの大らかさでジョンは日本の土を踏んだのだ。

だがこの時、彼の胸には「UK」の構想があった。「今に、キミをあっといわせるような、すごいミュージシャンを集めてグループを結成するからね。僕のはじめてのリーダー・バンドを」ホテル・ニューオータニのレストランで、ジョンは意味ありげにほほえんだ。自信に満ちたことばは、セッション・ミュージシャンとしての生活が、もう終りに近いことを私に教えてくれた。ロック・ビジネスの政治から遠くはなれて、彼はついに夢にまでみ

の政治から遠くはなれて……

シャンとしての真しな生活観、およびキングクリムゾン時代に身につけたロックへの厳しい目に、みごとに支えられているのだ。

1974年、彼はキング・クリムゾンのベーシストとして、ロバート・フリップやビル・ブラッフォードと共にアメリカン・ツアーの最中だった。ニューヨークのホテルでインタビューに応じてくれた彼は、何と白いワイシャツにネクタイをしめ、紺のスーツという正装。アタッシュ・ケースを持たせると、髪が長いというのをさしひいてみても、立派な銀行マンである。ほとんど予備知識なしでインタビューに参じた私だが、その時の印象が、今も強く彼のイメージを形造ついている。コーヒーを飲む手つきも、心なしか優華で、ロバート・フリップが現われなくてがっかりしていた私の懸念はすっかりふっとんでしまった。

ロック・ミュージシャンより、むしろ学者肌、評論家肌の青年である。あの頃はまだ24才だったはずなのに、大人の理性と機微が、ロック界における彼の存在をきわ立たせていた。ロバート・フリップやブライアン・イーノのような「奇才」でもないし、ましてや日のあたる場所だけを歩いてきたわけでもない。しかし、私はジョン・ウェットンの中に、もうひとつのイギリスをみたような気がした。

ジョンは競馬で有名なイギリスの町、ダービーに生まれた。クラシック好きな一家に育ち、兄が教会で宗教音楽に関係していたこともあって、バッハの曲などをきいて育った。幼い時はピアノやオルガンを習っていたが、12才の頃、エバリー・ブラザーズやシャドウズをきいて夢中になり、ギターを弾きはじめた。クラシックからロックへという、イギリスの60年代のミュージシャンに多かったパターンである。

大学を中退し、これといったあてもなく途方にくれていた彼に、友人がルーマニアに行かないかという話をもちこんできた。ロック・グループがルーマニアに公演に行くことになったのに、ベーシストがいない、ジョンにベースをやればルーマニアに行けるというのだ。彼は10分間だけ考えて、ベーシストになる決心をした。

それからモーグル・スラッシュ、ファミリーを経て、後期のキング・クリムゾンに参加し、ベーシスト＝ヴォーカリストとして、グレッグ・レイク、クリス・スクワイアと並ぶ評価を受けるようになる。キング・クリムゾンという、いわばロバート・フリップのワン・マン・グループにおいても、決して自分をたけだけしく主張するわけではなく、かといってサポート役に甘んじているわけでもない。

ミージシャンとしての陣取り競争はそれほど器用にはできないにしても、その間に得たものは何ものにもかえがたい。

クリムゾンが発展的解散をした後、ジョンは一時、ロキシー・ミュージックに加わったが、何といっても私たちを驚かせたのは、あのユーライア・ヒープに参加したことだった。無理もないことだ。精神性を至上のものとするクリムゾンから、ただただロックの野性の部分を売り物にするユーライア・ヒープへ。

「ジョンはお金のためにヒープに加わった」などという中傷もとびかったが、彼はそれを一笑のもとに伏してしまった。「何だって？もし、本当にお金がほしいのなら、落ち目のグループに加わったりはしないはずだよ」

1975年、ユーライア・ヒープの一員としてラウンド・ハウス・スタジオでレコーディング中のジョンに会った。クリムゾン時代の繊細さは、精悍な男くささに変わっていた。ロック・ミュージシャンの、本来あるべき姿が、端正な表情にチラリとみえかくれしていた。ちょっと、つかれているなという印象だ。決して調子のいい時期ではなかったはずだ。ヒープとは別に、ソロ・アルバムを創る計画があることを話して
のソロ・アルバム
尋ねると、非常に
ベーシストであると
ることを力説して
になっているのを
ちょっぴりかわい

そのソロ・アル
マンを加えた幻の
ため実現せず、ヒー
ブライアン・フェリー
ク・バンドに加わり、
ディングらと共に
美貌（？）は影も
うに太ったジョン・
哀愁とかかげりと
ミュージシャンの
土を踏んだのだ。

だがこの時、彼の
った。「今に、キミを
すごいミュージシャン
成するからね。僕の
ンドを」ホテル・ニ
ンで、ジョンは意味
信に満ちたことばは、
シャンとしての生活
を私に教えてくれた。
治から遠くはなれて、
た自分のバンドを結

1979年1月、雪の
ンド・アルバムを
に4たび会った。す
まっていて、自分の
奏するということに
ちだ。UKのオリジ
アラン・ホールズワ
ードがぬけて、ドラ
っていた。「大丈夫
いうと、き然として
パーマーは3人であ
奏していたんだぜ！

彼の所属するEG
くもあのパンク・ロ
ロードにある。パン
ベテラン・ミュージ
はいわばブリティッ
いできた男だ。そう
るロック・ミュージ
裏打ちされた貫録と
表情に、私はUKに
てとった。

芝居がかった人間
の世界。ジョンだけ
けて、気どらずに歩

水上はる

治から遠くはなれて……

真しな生活観、およびキング
に身につけたロックへの厳し
に支えられているのだ。
キング・クリムゾンのベーシ
バート・フリップやビル・ブ
共にアメリカン・ツアーの最
ーヨークのホテルでインタビ
れた彼は、何と白いワイシャ
しめ、紺のスーツという正装。
ースを持たせると、髪が長い
ゆいてみても、立派な銀行マ
んど予備知識なしでインタビ
どが、その時の印象が、今も
ジを形造ついている。コーヒ
ら、心なしか優華で、ロバー
現われなくてがっかりしてい
っかりふっとんでしまった。
ージシャンより、むしろ学者
青年である。あの頃はまだ24
のに、大人の理性と機微が、
る彼の存在をきわ立たせてい
フリップやブライアン・イー
ス」でもないし、ましてや日
けを歩いてきたわけでもない。
ョン・ウェットンの中に、も
リスをみたような気がした。
ど有名なイギリスの町、ダー
クラシック好きな一家に育
宗教音楽に関係していたこと
いの曲などをきいて育った。
やオルガンを習っていたが、
リー・ブラザーズやシャドウ
になり、ギターを弾きはじめた。クラシックからロックへという、イギリスの60年代のミュージシャンに多かったパターンである。

大学を中退し、これといったあてもなく途方にくれていた彼に、友人がルーマニアに行かないかという話をもちこんできた。ロック・グループがルーマニアに公演に行くことになったのに、ベーシストがいない、ジョンにベースをやればルーマニアに行けるというのだ。彼は10分間だけ考えて、ベーシストになる決心をした。

それからモーグル・スラッシュ、ファミリーを経て、後期のキング・クリムゾンに参加し、ベーシスト＝ヴォーカリストとして、グレッグ・レイク、クリス・スクワイアと並ぶ評価を受けるようになる。キング・クリムゾンという、いわばロバート・フリップのワン・マン・グループにおいても、決して自分をたけだけしく主張するわけではなく、かといってサポート役に甘んじているわけでもない。

ミージシャンとしての陣取り競争はそれほど器用にはできないにしても、その間に得たものは何ものにもかえがたい。

クリムゾンが発展的解散をした後、ジョンは一時、ロキシー・ミュージックに加わったが、何といっても私たちを驚かせたのは、あのユーライア・ヒープに参加したことだった。無理もないことだ。精神性を至上のものとするクリムゾンから、ただただロックの野性の部分を売り物にするユーライア・ヒープへ。

「ジョンはお金のためにヒープに加わった」などという中傷もとびかったが、彼はそれを一笑のもとに伏してしまった。「何だって？もし、本当にお金がほしいのなら、落ち目のグループに加わったりはしないはずだよ」

1975年、ユーライア・ヒープの一員としてラウンド・ハウス・スタジオでレコーディング中のジョンに会った。クリムゾン時代の繊細さは、精悍な男くささに変わっていた。ロック・ミュージシャンの、本来あるべき姿が、端正な表情にチラリとみえかくれしていた。ちょっと、つかれているなという印象だ。決して調子のいい時期ではなかったはずだ。ヒープとは別に、ソロ・アルバムを創る計画があることを話してくれた。エッ？ベーシストのソロ・アルバム？と私がけげんそうにそう尋ねると、非常に心外だという顔で、自分はベーシストであると共にミュージシャンであることを力説していた。彼があんまりいちずになっているのをみたことがなかったので、ちょっぴりかわいらしいなんて思ったりした。

そのソロ・アルバムは、リック・ウェイクマンを加えた幻のバンドの話がもちあがったため実現せず、ヒープをやめたジョンは再びブライアン・フェリーにさそわれて彼のバック・バンドに加わり、1977年夏、クリス・スペディングらと共に来日した。しかし、往年の美貌（？）は影も形もなく、ひたすら健康そうに太ったジョン・ウェットンがいたのだ。哀愁とかかげりとかは、みじんもなく、職業ミュージシャンの大らかさでジョンは日本の土を踏んだのだ。

だがこの時、彼の胸には「UK」の構想があった。「今に、キミをあっといわせるような、すごいミュージシャンを集めてグループを結成するからね。僕のはじめてのリーダー・バンドを」ホテル・ニューオータニのレストランで、ジョンは意味ありげにほほえんだ。自信に満ちたことばは、セッション・ミュージシャンとしての生活が、もう終りに近いことを私に教えてくれた。ロック・ビジネスの政治から遠くはなれて、彼はついに夢にまでみた自分のバンドを結成したのだ。

1979年1月、雪のロンドンで「UK」のセカンド・アルバムをレコーディング中のジョンに4たび会った。すでに5月の日本公演が決まっていて、自分のバンドがついに日本で演奏するということに、非常に興奮したおもちだ。UKのオリジナル・ライン・アップからアラン・ホールズワースとビル・ブラッフォードがぬけて、ドラマーを加えた3人組になっていた。「大丈夫？ たった3人で……」というと、き然として、「エマーソン・レイク＆パーマーは3人であんなにすごいロックを演奏していたんだぜ！」と胸をはってこたえた。

彼の所属するEGマネージメントは、奇しくもあのパンク・ロックの震源地、キングス・ロードにある。パンク・ロックに理解を示すベテラン・ミュージシャンも多いが、ジョンはいわばブリティッシュ・ロックの正統を継いできた男だ。そろそろ30代を迎えようとするロック・ミュージシャンの、試練と情熱に裏打ちされた貫録と、一段と渋みの加わった表情に、私はUKにかけたジョンの意地をみてとった。

芝居がかった人間の多いロック・ビジネスの世界。ジョンだけは、いつもロックをめがけて、気どらずに歩き続けてほしい。

水上はるこ／Haruko Minakami

U.K. TOURING STAFF

U.K.

JOHN WETTON ● BASS & VOCAL

EDDIE JOBSON ● KEYBOARDS & VIOLIN

TERRY BOZZIO ● DRUMS

MANAGEMENT-E.G. MANAGEMENT

SAM ALDER

PATRICK SPINKS ● TOUR MANAGER

CREW

DAVID FIDLER ● PRODUCTION MANAGER

ALAN GOLDBERG ● LIGHTING DESIGNER

NOEL MOWER ● SOUND ENGINEER

ELIZABETH FIDLER ● TECHNICIAN

GRAHAM DAVIES ● ROAD CREW

TERENCE READ ● ROAD CREW

JAPANESE STAFF

Promotor ● Shinichiro Hata, ONGAKUSHA CO.,LTD

Production Manager ● Terumoto Takagi, ONGAKUSHA CO.,LTD.

Tour Manager ● Daniel Nenishkis, ONGAKUSHA CO.,LTD.

Knut Kraft, ONGAKUSHA CO.,LTD.

P.R.Manager ● Hiroshi Ueno, ONGAKUSHA CO.,LTD.

Assistant P.R.Manager ● Kimihiko Fujiwara, ONGAKUSHA CO.,LTD.

Stage Manager ● Michio Shirai, ONGAKUSHA CO.,LTD.

Lighting ● STAFF SERVICE CO.,LTD.

P.A. ● TOKYO SOUND SYSTEM CO.,LTD.

Thanks to POLYDOR

Design ● GAUSS

Art Conception ● ENCYCLO MEDIA CORPORATION